

教えて!

市立病院

〈第 106 回〉

検診を受けて病気の早期発見を

■問合せ / 市立病院総務課企画財務担当 ☎ 22-2450

【今月のドクター】

第二内科医長 三浦 友来^{ともき} 医師

普段外来をしていると「開業医で胃癌や大腸癌が見つかった」と紹介になる患者さんをよく診察します。病院では、さらに検査を進めて治療を検討していきますが、癌が既に進行していて、手術でも取りきれないほど浸潤^{しんじゆん}や転移が進んでいたり、もっと早く見つかっていれば内視鏡で切除できた状態だったりすることがあります。

毎年の検診を受けているか聞くと、「2ヶ月に1回採血している」「検診は受けていないけど、血圧の薬をもっているから大丈夫」などと答える

患者さんが思っている以上にいます。こういう患者さんは、時々血液検査を受けていても、胃バリウム検査や胃カメラ、便潜血検査、大腸カメラ、腹部エコー検査など、癌を早期発見するための検査は受けていないのです。

例えば大腸癌検診として、便潜血検査は症例対象研究により死亡率減少効果があることが示されています。検査が陽性の場合は大腸カメラを受けることをお勧めしていますが、半数近くの割合で大腸ポリープが見つかります。

一般に、大腸にイボのように隆起してできたものをポリープといいます。ポリープの癌化に関しては大きさが最も重要視されています。大腸癌は、そ

の前駆病変と考えられているポリープを内視鏡で切除することで、罹患率^{りかんりつ}が75～90%抑制可能であり、約50%の死亡率抑制効果が得られるとの報告があります。原則6mm以上のポリープは内視鏡での切除が推奨されています。

先日進行した胃癌の患者さんがいましたが、その方は検診を受けていて、異常を指摘されていたのに放置していました。もっと早期の段階で治療できたのではないかと、正直ちょっともったいないなあとも思ってしまいました。

胃カメラや大腸カメラは多少なり苦痛を伴いますが、静脈麻酔を使用しての検査を受ける患者さんも増えてきています。外来で相談してみてください。